

## トンケストラはどんな音 前代未聞の珍音楽会

百年戦争（一三三八〜一四五三）は、ジャンヌ・ダルクの活躍で何とかフランスの勝利のうちを終了した。しかし長い戦いの間に国土は荒廃し経済も停滞していた。

そういう時代に即位したヴァロア王朝六代目ルイ十一世（在位一四六一〜一四八三）は経済の立て直しに心を砕き、農業・冶金工業の振興を進め、王権の絶対主義化へ向けて内政につとめた。

そんなある日、政務に飽いた彼は、なにかおもしろいことはないかと同席のベイヌの修道院長に話しかけた。修道院長は承知しましたとひきさがり、様々な案を練り始めた。

そして、ブタの鳴き声で音楽演奏ができないものかという思いにとりつかれた。

ブタを小さな杖で叩き鳴かせると、品種や大きさにより声が違うことに気がついた。研究をすすめて、どうやらこれらのブタの鳴き声でオクターブ編成することができるという自信を得て、前代未聞のブタによる演奏会を開くことになったのである。

いよいよコンサートの当日となった。

大きなブタが低音部、子ブタは高音部と、何十頭ものブタが音階にしたがって並べられた。各々のブタの背中の上には叩き棒が下がり、その棒と演奏家である修道院長の手もとの鍵盤

とはロープでつながっている。

修道院長がキーをひくとブタを叩き、一定の音階でブーと鳴くという次第。

王様はもとより、宮廷貴族の居並ぶ前で演奏会は始まった。

叩き棒がうまくあたればそれなりの音が出るはずだったが、なにせ相手は動物のこと、必ずしも楽譜どおりの音楽が奏でられたというわけではないが、記録によると、辛うじて「音楽」と呼ぶことのできるものを聴くことができたそうである。

参加者ごとごとく抱腹絶倒、修道院長はおほめの言葉をいただいたとのことである。

